



Report!

# チーム力で築く 救急医療体制

by 川崎医科大学附属病院



荻野教授、椎野教授、井上准教授の3人が率いる高度救命救急センターには医師、看護師、放射線技師などそれぞれのエキスパートがチーム体制で診療にあたっている。

初期から三次救急まですべての病気やケガに対応する高度救命救急センター。現在、20床のICU・SCUを有し、ドクターヘリによって岡山県内だけでなく、広島県、香川県まで広範囲な地域をカバーしている。



中学から大学までバスケットをやっていたが最近はおぼろ自転車。出身が山形なので実は、スキーも得意なんです。

**荻野 隆光 教授**  
Ryukoh Ogino  
■認定医・専門医・指導医  
日本救急医学会認定救急科専門医・指導医  
■専門分野  
救急診療(とくに外傷外科、集中治療)  
医師としてのスタートは横須賀米海軍病院、アメリカで5年間外科を研修という異色の経歴を持つ。1989年川崎医大救急医学教室へ。ドクターヘリは2001年の本格運行から現場責任者として関わっている。



中学・高校時代に友人2人が外傷で他界。その時から救急医を目指す。聖路加国際病院での研修後、アメリカ留学も検討したが自分の目指す救急医療を学ぶことができる場を求めて2007年に川崎医大へ。

妻も医療(看護師・短大教員)に携わっています。休日は2人で心肺蘇生の講習などにインストラクターとして参加することもあります。

**井上 貴博 准教授**  
Takahiro Inoue  
■認定医・専門医・指導医  
日本救急医学会認定救急科専門医  
■専門分野/救急診療



二四時間三六五日、休むことなくすべての患者さんを受け入れる。

「高度救命救急センターの特徴として、一番に挙げられるのは初期から三次救急まで、あらゆる病気やケガに対して「二四時間、三六五日」休むことなくすべての患者さんを受け入れている点です」と語るのは荻野隆光教授。一九七九年、重症救急患者の収容・治療の中心施設として県下で初めて開設された救命救急センターを母体とし、一九九四年には高度救命救急センターに認定。現在、年間二万二〇〇〇例の患者を受け入れている。

同じく当センターで救急診療にあたる椎野泰和教授はこう続ける。「軽症から重症までという特徴に加えて、当センターは受け入れから診断、治療、退院、そして社会復帰まで長い時間軸で患者さんに寄り添っています。初期だけでなく、患者さんが以前の様な社会生活が送れるまで、最初から最後まで責任を持って対応する。そうしたキャパシティの広さも当センターの強みのひとつです」。

そして両教授を支える井上貴博准教授：「私は埼玉県出身ですが、救急医療を学びたくて川崎医科大学へ進みました。当時、日本初の「救急医学教室」も開設されていて、救急医療に関しては最先端の知識と技術を学ぶことができました。そうした土壌が当センターにも受け継がれています。気の抜けない現場ですが一緒に働くスタッフはまさに仲間。仕事だけでなくプライベートでもお互いのつながりを大事にしながら診療にあたっています」。

全科がひとつのチームとして機能。高い意識と使命感で挑む。

一九九七年には災害拠点病院にも指定された。三五道府県で四三機が稼働するドクターヘリの全国第号として、本格運航が始まったのは二〇〇一年。現在、出動件数は年間四〇〇〇件を超え、岡山県内だけでなく、状況によっては広島県、香川県まで出動している。また二〇〇四年には脳卒中科のSCU(脳卒中集中治療室)を併設するなど、地域医療の中核として、その存在価値をさらに高めている。

西日本最大規模の機能と体制は、まさに救命救急医療の先進基地。加えて荻野教授は、チームワークのよさを当センターの強みと強調する。「当センターはたくさんの人に支えられています。ひとりだけが特別ではない。さまざまな患者さんに対応するには全科がチームとなつて機能することが大切。もともと川崎学園には伝統的に救命救急に対する高い意識と使命感が根付いています。すべてのスタッフが心を交わしながら医療に取り組み。それが当センターの一番の強みです」。

最後に椎野教授は言う。「救急の現場は精神的にも肉体的にもストレスがかかる場。だから「こそ」んどく、楽しく」がチームのモットーです。人間は笑顔の時に一番パフォーマンスも上がりますから」。二四時間、三六五日。スタッフたちの笑顔が救急医療の原動力だ。

お問合せ  
川崎医科大学附属病院  
086-462-1111  
http://www.kawasaki-u.ac.jp/hospital/